

世界のこと、もっと知りたい！



2016年

64

春号

2016年 4月1日(金)発行

HOKKAIDO
INTERNATIONAL
CENTER(OBIHIRO)

もしり

Moshiri

JICA北海道(帯広)ニュース

「もしり」とは、アイヌ語で大地の意味。
北の大地から、国際協力の「今」を伝えます。

<http://www.jica.go.jp>



ネパールから来たアルンさん(左)と、
アルメニアから来たルイーザさん(右)と、
詳しくは2面研修員eyeで。

日本のこと 研修員に伝えよう！ 地域のこと

JICA北海道(帯広)では年間約350名の研修員を開発途上国から受け入れており、農業や畜産、環境等様々な研修を行っています。JICA北海道(帯広)は研修員に対し、日本の文化や慣習を知ってもらうために、週末や夕方の研修以外の時間を活用し、様々なプログラムを提供しています。

研修員の日本文化体験

研修員の日本文化体験イベントのひとつに「華道(生け花)」体験があります。花を飾る風習は他の多くの国にもありますが、花の長さや形、色などを見て、より美しく見えるよう整えて飾る「生け花」は、研修員からとても好評です。先生のお手本をもとに、研修員はみなより美しく見える配置を考えて花を生けます。ときには、日本人の私たちにとってはとても斬新な生け方をする研修員もいて、あっと驚かされるようなこともあります。自国でも花を飾って「IKEBANA」をしたいと言ってくれる彼らには日本文化の発信役としても期待をしています。



長年JICA華道(池坊)
講習でお世話になった
講師の相馬二三子先生と

地域住民との交流事業

JICA北海道国際センター(帯広)では、2014年度から、JICA研修員と住民が親交を深め、相互の文化・習慣や国際協力についての理解を深めるための交流事業を行っています。地域住民の方に企画・運営にご協力頂き、必要な予算(上限金額あり)をJICAが負担する、という形で、ホームページで公募しています。これまでに実施されたものの一例を紹介します。

<NPO法人 ぶれいおんとかち>による【イグルーを作ろう!】

親子自然体験プログラムの冬企画「イグルーを作ろう！」に、子どもたちと一緒に帯広の冬ならではの遊びを体験してもらうという内容で、研修員10名が参加。50人の地域住民と一緒に、講師の先生に教わりながら、雪をのこぎりで切りだし、そりで運び、積み重ねてイグルー(雪の家)を作る、という作業を行いました。雪の中での慣れない作業に途中リタイアとなった人もいましたが、最後まで残った研修員は、完成したイグルーのそばで、炭火で温めた豚汁とココア、マシュマロを楽しみました。「イグルーを作るのは素晴らしい体験だった」「地域の人、特に子どもたちと交流できてよかった」などの感想がありました。



完成したイグルー&通路の前で記念撮影

<北海道拓殖バス株式会社>による【鹿追「町」体験ツアー】

拓殖バスを貸し切って、町名物の“鹿追そば”と“鹿追焼”的制作体験をし、鹿追町の文化と魅力を体感するツアーで、研修員13名が参加。講師となる地元住民との交流を楽しみながら、鹿追そば体験では粉から麺を打ち、慣れないながらも麺切包丁を使ってそばを作りました。手打ちのそばは昼食として頂き、研修員らは「格別の味」と満足そうでした。また鹿追焼は、既に成形されているお椀に自由に絵付けをする体験でしたが、覚えた日本語を書いてみたり、故郷の風景を描いたりと世界に一つだけの作品が完成しました。作品は帰国前に研修員に手渡され、母国へのお土産になりました。



細く切る難しい技に挑戦！

2016年度 募集案内

2016年度も、イベントを企画・実施してくださる個人・団体を募集いたします。

詳細は後日、JICA北海道(帯広)ホームページで公開しますので、そちらでご確認ください。

One-dayおもてなしボランティア

“One-dayおもてなしボランティア”にチャレンジしてみませんか？
ご家族単位でもお友達同士のグループでもOK、まだ行ったことのない国、興味のある国のJICA研修員と1日交流してお友達になりましょう。「いろんな国の大ファンになってしまった！」というホストファミリーや、「日本のお父さん、お母さんができた」と感激する研修員。いつも日本人のおもてなしに驚いているJICA研修員ですが、みなさんとの出会いを楽しみにしています。

応募、申し込みはHPをご覧ください。

<http://www.jica.go.jp/obihiro/topics/2015/20160120.html>



新得共働学舎でチーズを楽しむ研修員とおもてなしボランティア



JICA北海道(帯広)には、研修員受入事業として開発途上国で必要とされている知識や技術を学ぶために各国から研修員たちが来日しています。彼らは帰国後、自国の発展のために指導的な役割を果たすことが期待されています。

ネパール・アルメニアからの研修員に自國のことや日本での生活について聞きました。

ネパールからやって来たアルンさん



農業地域における経営力、マーケティング強化による地場産業振興コース

■名前:アルンさん

■出身:ネパール連邦民主共和国

कुरी भेटौला (フェリ・ベトオンラ)
(ネパール語で“さようなら”)



Q1 ネパールってどんな国ですか?

世界最高峰エベレストをはじめ名峰連なるヒマラヤ山脈、カトマンズの古い仏教寺院、風光明媚な観光資源と農業が盛んな内陸国です。

Q2 研修で学びたいことは?

私の国では、日本で言う“一村一品”による地域振興に力を入れていますが、なかなか普及していません。私は日本が成功している秘訣を学びに来ました。

Q3 日本の農業の印象は?

私が研修で伺った農家では、5人家族で35haもの畑で生産に従事していました。しかも6次化でも成功しており、省力化、機械化の発展が素晴らしいと思いました。

Q4 日本での暮らしはいかがですか?

日本人の親切さにはただ驚くばかりです。ただ道を聞いていただけなのに、わざわざ車で送ってくれたことが2度もありました。



アルメニアからやって来たルイーザさん



農業地域における経営力、マーケティング強化による地場産業振興コース

■名前:ルイーザさん

■出身:アルメニア共和国

Ծնորվածություն (シュノラカルトゥン)
(アルメニア語で“ありがとう”)



Q1 アルメニアってどんな国?

黒海とカスピ海の間に位置する内陸国で、世界で最初にキリスト教を国教にした、信仰深く長い歴史を持つ国です。たばこやワイン、ブランデーが有名です。

Q2 JICAで研修した感想は?

日本の農業は国の補助金や農業組合のサポートがしっかりといて、効率的な生産システム、省力化、力強い経営を実現していると強く感じました。

Q3 日本での生活はいかがですか?

日本人はみなやさしく思いやりがあると感じました。また、世界に類を見ないほど仕事に熱心な一面も持っていますね。

Q4 日本で学んだことをどのように国で活かしたいですか?

日本の高度に進んだ生産管理システムやマーケティングなどの新技術を、国の農業生産向上や輸出力強化につなげていきたいです。

ボランティアの現場から

シニアボランティア



武田 順二さん

派遣国:トンガ

出身:帯広市

職種:野菜栽培

派遣期間:2015年3月~2017年3月



農村部での野菜栽培研修会「トマトの挿し木」の様子

トンガでの野菜栽培活動報告

2015年4月からトンガ王国農林水産省コーポレートサービス部門に、5月からは農村婦人局で野菜苗を配布する苗管理センターに配属され、9月からは同省の農業試験場にて、作物栽培試験に取り組んでいます。

作物栽培試験は試験場内の空き地で行っており、深さ40cmの溝に枯葉や雑草を入れ、その上に鶏糞と土を入れ、野菜類の苗を植えるベットを作りました。初めての畑のため、サンゴの石を含む固い土が多く、溝掘だけで1メートル1時間かかりました。肥料は鶏糞と枯葉雑草の堆肥だけで、農薬を使わずにトマトの挿し木を栽培中です。

現在の畑は、支柱の必要な蔓性の作物に、ネット、竹、ひもを設置したところです。



苗を植えるためのベットを掘る武田さん